

浄土真宗におけるお盆の迎え方

西要寺



お盆は、先立っていかれた方やご先祖がわたしたちのもとにかえって来られる特別な時として、通常と異なる飾りつけを行います。

浄土真宗では阿弥陀如来のはたらきによって浄土に往生した人は、お盆の時だけでなく、常にこの世に還（かえ）り来て、私たちを導き護（まも）ってくださいます。したがって、先立っていかれた方やご先祖はお盆の時だけ還（かえ）ってこられるのではない、とも言えるので、浄土真宗の門徒さんのなかではお盆を特別な時としないという地域もあります。しかしながら、お盆はあらためて先立っていかれた方やご先祖と向き合う時、阿弥陀如来に感謝を申し上げる時としていきたいものです。

浄土真宗のお盆について、飾りつけなどの話をします。初盆をお迎えの門徒さんや、お盆にあたりお仏壇をどのようにお供えをして飾っていけばよいかわからない門徒さんも参考にいただければ、と思います。

「お盆のお飾り」

月参りなどのいつものお参りの時よりも、少し華やかにお飾りいただくということになります。盆には棚を組まれる宗派もありますが、浄土真宗では棚を組まずに、お仏壇をお飾りしていただければ結構です。

平常時は三具足（みつぐそく）になっているものを、お盆などの特別な時には五具足（ごぐそく）にする方が望ましいです。しかしながら、お仏壇が小さいので置くことができない、またそもそも仏具が2対もないという場合は、三具足のままで構いません。

五具足とは、ロウソク立て一対（2個）、お線香などお香をお供えする香炉（こうろ）、花を立てる花瓶（かひん）一対（2個）の、あわせて五つの仏具のことです。



というように、お仏壇の前方に、横に並べたらいいのですが、お仏壇の横の幅の関係上、



というように、ろうそくを手前に持ってきてもらっても構いません。
なお、三具足の場合は、



というように、向かって左に花、右にはろうそくとなります。
この場合もお仏壇の横の幅の関係上、



というように、花とろうそくを手前に持ってきても構いません。

なお、浄土真宗では、お茶やお水をお供えする必要はありません。阿弥陀如来の西方浄土には八つの功德のあるというありがたい水があるので、お供えしなくてもいいのです。

【お供え物】

日々お供えするお仏飯（おぶっぱん）に加えて、お盆をはじめ、お彼岸やお正月、ご命日、ご法事の時など、特別な時には、お餅、お菓子、果物などをお供えしましょう。

お仏飯とは、仏様にお供えをするご飯のことです。右の図のように仏飯器（ぶっぱんき）にご飯を蓮のつぼみのように丸く盛り、阿弥陀如来の前や、その脇、つまり本尊（阿弥陀如来）に向かって左と右の掛け軸（親鸞聖人・蓮如上人、あるいは帰命尽十方無碍光如来・南無不可思議光如来）にそれぞれ一つずつお供えします（お仏壇の大きさによってはご本尊しかお供えできないケースもあります）。

また、霊具膳（りょうぐぜん）と言われるお膳や、右の図のような精霊馬（しょうりょううま）というキュウリやナスに爪楊枝や割り箸をさしたお供え物は、浄土真宗においてはお盆にお供えする必要はありません。

お供え物の飾り方ですが、お仏壇の中は、お供え物であふれるようにはせず、できるだけすっきりさせておきましょう。

お仏壇の中に入らない場合には、お仏壇の横などに台を置き、台の上にお供え



お仏飯



↑ 浄土真宗ではしません

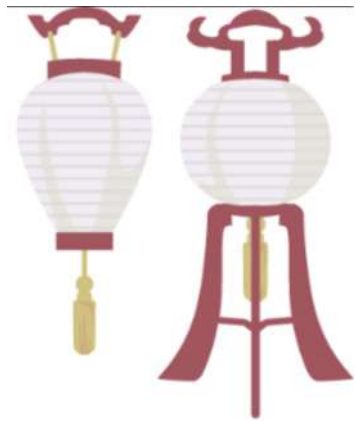
してください。あるいは、お仏壇の前にお盆を置き、その上に半紙を敷きお供えしていただいてもいいでしょう。



お花は、仏具の花瓶（かひん）にその時期らしいお花を生け、お供えします。毒花やとげのあるお花などは用いません。

お盆のお供え物は、これでないといけないというものはありませんが、夏のお花、蓮の花やほおづきなどを入れていただくとか、お盆らしい（夏らしい）お供え物をしていただくと、お盆の雰囲気が出てくるのでいいと思います。

初盆をお迎えされるお宅のご親戚から、提灯を贈りましょうか、と言われたと仰られました。提灯をもらっても置いておく場所がない、と言われていたもので、浄土真宗では提灯は必要無いので、ということやんわりと断られたらどうですか、と申し上げました。



盆提灯を特別に購入していただく必要はありませんが、提灯をお飾りすると、お盆らしさがぐっと増しますのでお飾りすることは否定しません。葬儀の時に使った提灯を使われるのもいいかと思います。

↑ 盆提灯もしないといけないということではない

一般的に、お盆に提灯をお飾りするのは、先に往かれた方が、お盆にあの世から還（かえ）って来られる際に迷わないように明かりを灯すという意味があると言われます。ただ、浄土真宗では、故人は阿弥陀如来によってお浄土に往生し、わたしたちを常に見護り導いてくださっている存在となられたのです。そして、往き来する際には、阿弥陀如来のはたらきによって迷うようなことは決してないので、迷わないように明かりを灯す必要はないということになります。

ただ、提灯をしないと寂しいという方もおられることかと思えます。室内のお仏壇の脇などに、提灯を飾られても構いません。お盆やお彼岸などの文化、風習は、仏教や浄土真宗で全てを説明することはできません。民俗的な要素が多分に入り混じって育まれてきたものです。先に往かれた方への想い、文化伝統を大切にいただきながら、仏様の教えに照らし合わせて大事にしたいものです。ご不明なこと、疑問に思われることがありましたら、お気軽に西要寺（06-6429-8241）までお問い合わせください。

なお、西要寺におきましては、8月13日・14日・15日の3日間、午前11時より盂蘭盆会（うらぼんえ）法要を西要寺本堂においてお勤めします。

過去帳をご持参のうえ、お参りください。また、初盆をお迎えの方など、お宅への仏参のご相談がある方は気軽にお申し出ください。

【お盆の由来】

お盆の由来が説かれている、『孟蘭盆経』というお経があります。そこには《目連尊者が母を救うという話》が説かれています。目連（もくれん）尊者はお釈迦さまの十大弟子の一人です。お釈迦さまの弟子のなかで、特に秀でた才能を持っている弟子十人のなかの一人です。目連は神通第一の弟子とされています。お釈迦さまの弟子のなかで、神通力が最も優れている方です。目連尊者は母親と非常に仲が良かったのですが、母親が亡くなります。亡くなったお母さんがどこに往かれたのか心配になって、目連尊者は自ら具わっている神通力によってお母さんがおられる世界を知ります。実はお母さんは餓鬼道に落ちていたのでした。目連のお母さんが落ちていかれた餓鬼道の世界とは、常に餓えやノドの乾きに悩まされる世界です。目連は餓鬼道に落ちている母親を救うためにはどうすればいいのか、お釈迦さまに尋ねに行かれます。目連はお釈迦さまから、雨季の安居（あんご）の終わる日、つまり雨季の間に行う修行勉学期間の終わる日に、仏・法。僧（僧団）に供養をすればいいことを聞きます。そこで、目連はお釈迦さまの言われた通りに実行し、お母さんを餓鬼道から救い出したという話です。

【浄土真宗におけるお盆】

実際のところは、ご先祖が悪いところに生まれているかどうか分からないと思うことでしょう。また、浄土真宗では阿弥陀如来のはたらきによって極楽浄土に生まれさせていただくことができると説かれます。善いところに生まれていたらもう何もすることはないじゃないか、と思うことでしょう。しかしながら、私たちは、阿弥陀如来やご先祖によって護っていただいております。それに対して、感謝していくというのがお盆において私たちが行うべき供養ということになるのです。以上のような内容が盆の由来なのですが、さらにさまざまな思想・信仰・風習などと融合して今のようなかたちになりました。

浄土真宗本願寺派 **西 要 寺**

〒661-0024

尼崎市三反田町1丁目7-27

電話 06-6429-8241

FAX 06-6429-8239